
《論 文》

カフカの『変身』(その1)

川 合 増 太 郎

I. はじめに

カフカは1912年9月22日から23日にかけての有名な一夜のうちに『判決』を書き上げ、これによって、いわゆる「文学的突破」を果たし、彼の文学の創作形式を確立させたのである。この創作形式の確立により、それまで彼のうちに蓄積されていた諸問題に出口が与えられて表現され、また、表現されることを通じて、当の問題が更に追求されることになるのである。

『判決』成立後の三ヶ月強の間に、長編小説『失踪者』の大部分の章（第一章から第七章まで）及び『変身』と、夥しい量の原稿が書かれる。しかも同時に、労働者災害保険局の役人としての仕事をこなし、またフェリーツェ・パウアーとの間で、連日に亘る大量の文通が行われているのである。この手紙の一つ一つは決して短いものではなく、日によっては2通、3通と書かれることもあるのである。

このように、堰を切ったように大量の作品や文書が書かれたことは、『判決』によってカフカの創作方法が確立した事を証明していると共に、各々の作品が類似した問題を対象としていることをも物語っていると言える。というのも、この「文学的突破」を可能にした要件の一つは、1911年10月より翌年の2月までプラハで上演を行ったイディッシュ劇団との出会いや劇団員、特に座長のレヴィとの交流を通して目の当たりにした生きたユダヤ性であり、いま一つはフェリーツェ・パウアーとの出会いにあったからである。つまり、当時のプラハのユダヤ人社会は崩壊の一途を辿っており、本来のユダヤ教、ユダヤ文化、ユダヤ共同体は存在せず、ポーランドからやって来たこの劇団との出会いにより如何にプラハのユダヤ教が墮落し、不健全なものであるか、認識させられる一方で、それにも拘らず、「妻帯せざる者は人にあらず」⁽¹⁾という、ユダヤ教の律法書であるタルムードの中の言葉を信奉し、また、父親の強い影響もあって、独身であることに強い罪悪感を抱いていたカフカの前に、結婚の具体的な対象となりうるフェリーツェ・パウアーが出現して、婚姻とそれに伴う共同社会への参入という問題に直面することになったのである。

序でになるが、カフカが結婚と結婚による共同体への参加に強い執着を示し、独身であるこ

とに異常とも思える程の罪悪感を感じなくなったのは、皮肉にも当時のプラハの全く形骸と化したユダヤ性に淵源があるのである。父親の世代からは、真のユダヤ性を伝えられず、その為中味を失った、父の世代のユダヤ性が規範となるという逆説が生じ、婚姻が強迫的な観念になったのである。しかし他方で、この形骸と化したユダヤ性や崩壊させられたユダヤ人社会が、カフカの生存を脅かすために、頑強に父親に反抗し、批難し、父親の影響から脱却するためにも結婚を望みながら、また、プラハのユダヤ人を取り巻く状況故に、カフカは自己の存在への疑念に悩まされ、文学創作によって自己の根柢の探求を余儀なくされることになるのである。そして、他ならぬこの創作活動がカフカの生を支えるものとなり、これが絶対的な孤独を要求するため、結婚の最大の障害になるというパラドックスが生まれるのである。

カフカの内部で蓄積されていた問題は、このような錯綜したユダヤ的諸問題であり、その集約的な表現である父親対息子の対立、結婚問題が、1912年の秋に一気呵成に作品として表出したのである。それ故、『判決』、『失踪者』、『変身』はほぼ同一の問題意識に基づいて書かれたと言える。カフカが、『失踪者』の第一章の『火夫』を独立させ、『判決』、『変身』と共に、短篇集を『息子たち』とのタイトルで出版することをクルト・ヴォルフ社に提案している⁽²⁾のは、その証左と言える。なかでも、『変身』と『判決』は、作品中に内包される問題が極めてよく類似していて姉妹作と呼んでもおかしくない程なのである。

カフカは『判決』について度々自己解説を試み、満足⁽³⁾とカタルシス⁽⁴⁾さえ感じていた。だとすると、内容的にはほぼ類似している『変身』が、何故書かれなければならなかったのかという疑問が生ずる。また、カフカの作品の中心には謎があって、作中の一切のものがこの謎に関わるという求心性があるのに対して、『変身』にはこれが見られない。また、謎が謎として残され続け、従って未完のままで終わるのが普通であるのだが、『変身』は起承転結がはっきりしていて、物語としての構成力が強く完結している。こうした点で、『変身』はカフカの他の同一の問題圏を扱っている作品と際立った違いを見せている。

しかしながら、創作方法の確立と同時に成立した作品でありながら、『変身』がこのような相違や特異性を備えていることが、逆にこの作品を理解する手がかりを与えてくれているのである。また、作品の成立時期という観点から見れば、『判決』同様カフカの文学の出発点にあり、その後の作品の中で発展・展開を遂げる様々な問題を萌芽的に内包しており、この作品についての上述の相違や特異性を考慮すれば、『判決』の解釈から得られるものとは自ずから異なったカフカ文学へのパースペクティブが得られるであろう。

Ⅱ. 『変身』成立前史

『変身』は、主人公グレゴール・ザムザが「ある朝、胸苦しい夢から目をさますと」「ベッドの中で、途方もない一匹の毒虫(Ungeziefer)に変身してしまっているのに気がついた。」(E S. 57) という文で始まる。これはカフカの作品ではおなじみの始まり方で、有無を言わず

読者を特異な状況の中に引き込んでしまう。しかし、一見極めて特異な状況設定に見えはするものの、こうした状況の設定の仕方は、カフカの実生活の体験のうちに素地が存在しているのである。決して、作品としての何らかの効果を狙って考案されたものではなく、「形式とは内容の表現ではなく、そのきっかけ、つまり内容にいたる扉と道にすぎないのです。きっかけが作動する、すると隠れた背景が開かれるのです。」⁽⁵⁾とカフカが語っているように、カフカ自身にも把握できない自己の内部世界を探求しうる形式を、自己自身を不安や罪悪感で刺激してやまない想念や感情の中に探すのである。

カフカにとって創作活動が、あくまでも生存のための戦いであり、自己の存立基盤やアイデンティティーの追求、或いはこれを阻害しているものの追求にあるとすれば、自己の存在を脅かしてやまぬ、得体の知れない感覚を包摂し、予め解釈や規定が加えられていない舞台が用意されなければならないのである。こうした舞台の上に、ありのままの生の客観的対応物が載せられて、創作を通じて作者自身にも見透し難いものが追求され明らかにされなければならないのである。

『変身』に関して言えば、カフカは日記の中で、

「一瞬ほくは甲冑を着ているような感じがした。

例えば、腕の筋肉は、ほくにとってなんと縁遠い存在であろう。」⁽⁶⁾

と書いており、後に自らを甲虫状の毒虫(Ungeziefer)へと変身させてもおかしくない身体感覚を持っていたのである。また、このような尋常ではない身体感覚の背後には、精神の分裂、自我の未確立といった問題が、存在の統一を突き崩す重大な内的な問題が、未解明、未解決のまま意識の届かない所に存在しているのである。無論、この問題は、世紀の転換期のプラハのユダヤ人を巡る状況と深く関わっており、同時にカフカ家における父子関係の問題をも反映している。カフカが解明しなければならない問題の中核がここにはあり、それ故にこそ、こうした身体感覚を逆手にとって自己の身体を変身させるという状況を設定してみせるのである。また、カフカが幼少期よりこの問題に悩まされ続けてきたと思われる以上、この問題が生まれながらにしてカフカについて回ったものであることも確かだと言える。

カフカの最初期の作品と考えられる『ある戦いの記録』に既に、この種の問題が取り扱われている。この作品の中で、教会で奇妙な祈り方をする若者が登場する。彼は祈りを捧げる際、全身を床に投げ伏し、時折、全身の力をこめて自分と自分の頭を掴んだり、床石の上に広げた手のひらに頭を打ちつけて、嘆息をつく。主人公にこの奇妙な祈り方を見咎められた若者は、こういう祈り方をするのは必要があってのことで、「しばらくの間にせよ、人びとの視線によって自分をしっかりきたえてもらうことが必要なんです。」⁽⁷⁾と答える。これに対して主人公は、この若者の状態を「それは、熱病のようなもの、陸地にいながら船酔いに似た状態、一種のらい病」⁽⁸⁾と規定し、更には、事物の本当の名前に満足できず、大急ぎでその場で思いついた名前を事物の上にふりかけるが、その事物から離れるや否や、再びその名前を忘れてしまう

のだとも説明する。

ここにも、自己の身体を自己のものと感じえず、分裂してやまぬ自我の様相が表われており、自己の存在の基盤すら喪失してしまった状況が表現されているのである。『変身』という作品のうちにある問題と同様の問題が潜んでいるのである。

また、『判決』にその前駆となる作品、「ある都会風の風景」が日記中に記述されているように、『変身』にもより明瞭な基盤をなす作品、『田舎の婚礼準備』がある。この作品は長編小説として企図され、1907年春から翌8年にかけて書かれたと推定され⁽⁹⁾、それぞれ異なった三つの草稿があるが、そのいずれも未完のままで終わり、習作として全集の中に収録されている。

主人公ラバーンは役人をしており、「役所では誰もが孤独だ。——中略——しかもこうしてほくがと言わずにだれもがと言っているあいだは、まだ無難で、こんな話も口にすることができる。しかし、おまえが、これは自分自身のことなのだと言状するがはやいか、たちまち八つ裂きにされ、解雇されてしまうのだ。」⁽¹⁰⁾と告白する。ここで表現されているのは、単なる仕事と個人の対立ではなく、個人が人としての存在基盤を確立できていないことである。というのも、主人公は自己の実体が明らかになれば、「八つ裂きにされ、解雇」されるという強い不安を抱いているのであり、他の人のように、恐らくは仕事の非人間性が自己を疎外してよこすだけということに止まらず、もっと深く何かしら決定的な深淵が、ラバーンと彼の職業の間に横たわっていると考えられるからである。

恐らくは、ラバーンは『ある戦いの手記』の中の祈る若者同様、自己を支える根拠など何も有していないのである。自らの存在の無根拠性、非統一性といったものを糊塗して、社会的な体面をかりうじて保っているにすぎないのだ。それ故、あらゆる実社会の出来事が彼にとって常に自己崩壊の危険性を含んでいるのである。

『田舎の婚礼準備』のあらすじは、役人である主人公ラバーンが、一足先に田舎へ帰って、彼との婚礼の準備をしているベティーのもとへ行き、彼女と共に婚礼の準備をすべく、列車や乗り合い馬車を乗りついで田舎へ行こうとする、という単純なものである。しかし、作品は未完で、翌日にはベティーの村へ到着するはずの乗り合い馬車に揺られながら、田舎の夜の風景の中を進んでゆく所で終わっている。

しかし、彼は仕事で疲れ切っているとの理由で、田舎へ行くのに乗り気ではなく、折からの雨や雑踏、駅へ行き着くことの難儀さ、不愉快であろうと思われる田舎の気候やそこでの人々との交渉の苦痛などを持ち出してきて、田舎への出発を一寸刻みに遅らせようとする。こうした主人公の心機のうちこそ、この作品の主題は見出される。ここには既に、無限の障害物が立ち現われて目標に到達できないこと、否、そもそも接近さえできないという後年のカフカの作品構造の萌芽が姿を見せているのであるが、ここはそれを詳述する場所ではない。

この作品でラバーンが出発に乗り気ではなく、色々な理由を持ち出して出発を遅らそうとするのは、婚礼準備の為に田舎へ出かけることに先述したような危険を感じているからである。

既に述べた通り、結婚問題こそカフカが背負い、悩まなければならなかった問題の総体の集約的な結節点なのである。一方では結婚を切に願いながら、他方では、存在の根拠が予め喪失されているために、自我が形成されず、そのため結婚に値する生の内実なぞ持ち合わせていないことが白日のもとに晒されてしまうのである。

ラバーンと職業の関係が、単に人間を疎外するものと人間性の対立ではなく、職業がラバーンを決定的に破壊する可能性を秘めているのも、こうしたラバーンの内面世界と関連付けてみれば、極めて明瞭になるのである。

『ある戦いの記録』の祈る若者に見られた身体感覚の異常、日記中の記述の背後にあるこのような人間の諸問題は、ラバーン、『判決』のゲオルク・ベンデマン、『変身』のグレゴール・ザムザに共通しており、彼らはすべて同類なのである。確かに、『判決』のベンデマンには、この異常な身体感覚は出てこない。しかし、彼は世間的に体面を取り繕うために、職業の世界にのみ自己を限定し、偽りの結婚に踏み切ろうとする他、ベンデマンの分身と思われる「ロシアの友人」が現われたり、また、この作品の自己解説の中で、「ゲオルクは何も所有していないのだ。——中略——共有のものがすべて父の周りに積み上げられ、彼自身が一度も十分に保護したことのないもの、何度かのロシア革命に曝されたものとしてしか感ずることができない。」⁽¹¹⁾とカフカが述べている通り、実質的には他の作品に見られるような身体感覚と等価の感覚が見られるのである。

こうした尋常でない身体感覚とその背後にある人間的な諸問題は、最も明瞭に『田舎の婚礼準備』に見られるのである。田舎へ婚礼準備に出かけるのに危険を感じたラバーンは次のように想像する。「子供の頃、危険なことをするときはずっとそうしていた要領で、今度も切り抜けられないだろうか。なにもほく自身が田舎まで出かけることはない、そんな必要はない。ほくの服を着た、ほくの身体を派遣すればいいのだ。——中略——ほくは、ベッドに寝ているあいだ一匹の巨大な甲虫(Käfer)、くわがた(Hirschkäfer)、あるいはこふきがね(Maikäfer)の姿になっているはずだ。——中略——一匹の甲虫(Käfer)、その巨大な姿、そうだ。ほくは、さらに、冬眠中ということにしておくつもりだ。そこで、小さな脚をほくの膨張した胴体に押しつける。」⁽¹²⁾ (傍点筆者)

ここでは最早、内面の異常が身体感覚の変容として表現されているのではなく、虫へと変身した己れの姿こそ真の自己であり、人間の姿をして田舎へ出かける分身の方が、己れを偽る仮の姿だと意識されるという逆転現象が起こりかけているのである。ラバーンの本心の内でこうした意識が根付いているのは確かであるが、しかし未だ変身願望という形でしか表現されていない。だが、ここから人間の虫への変身という状況設定までの距離、『変身』までの距離はごく僅かなものである。とりわけ、この作品で思い描かれている虫と『判決』の主人公グレゴールが変身する虫とは酷似しているし、職業と自己の対立、明瞭に表われてはいないものの、一つの隠されたテーマとして結婚問題も『変身』では取り扱われているのである。『田舎の婚礼

準備』では父親対息子の問題は内包されてはいないが、既に『変身』の状況設定がほぼ確立しかけていること、また、内包されている問題性からして、創作方法の確立に伴って、新たな装いをこらして作品化されるのは必然であったと言える。

Ⅲ. 変身の原因

既に述べてきた事柄から変身の意味とその原因・理由のおおよその輪郭は推測できよう。しかし、「文学的突破」によって確立されたカフカ独自の文学形式の中で、作者自身にも気づかれていない問題、ここでは変身という事態に関わる凡ゆる問題が探求されるようになったのであるから、以前とは比較にならない程広汎で複雑に錯綜した意味がこの作品のうちに存在していることは明らかである。それ故、前史は前史として踏まえながらも予断を持たず、新たな眼で考察を加える必要がある。

『変身』の主人公グレゴール・ザムザは、5年前に父親の商店が破産した際に、ある商會に残された借金を返済するために、その商會に最初は店員として勤めることを余儀なくされたのだが、その働きぶりにより歩合制でより稼ぎがよい出張販売人になり、田舎の小売店を旅して卸売り販売をする生活をしている。最初の頃は、彼は「すべてを犠牲にして、家族みなをお先まっくらの状態に落としこんだあの商売の失敗を、能う限りすみやかに、みな記憶から拭き去りたい」(E S. 78 f) と思い、「それであの頃は、まるで火の玉のように働きはじめ」た (E S. 79) のであった。その彼が、変身する頃には「何と厄介な仕事を選んでしまったものだろうな。くる日もくる日も旅また旅。本店でする仕事にくらべて、気のみようはおよそ一通りのものではないし、——中略——人と会うといえば、相手は始終変わって、つきあいはほんのいつとき、人間らしく心が通じるためしなぞ、あるわけもない。こんな生活の一切合財、悪魔にのしをつけて進上したいよ！」(E S. 58) とか、「親がいるからこそこらえもする、さもないければ、とうの昔にやめますといっているさ、社長の前に進み出て、腹藏ない所をあけすけに申し上げているさ。」(E S. 58) という風に思い、自分の職業を呪詛するようになっているのである。そして、後5、6年はかかるであろうが、親の借金を返し終えて、この職業から解放されることを切に願うようになっているのである。

しかしながら無論、彼はいま暫くの間はこの職業を放棄する訳にはいかない。この日も朝5時の車で出張旅行へ出かけることになっており、家具を揺らす程けたたましい音を立てる目覚まし時計をセットしてあったにも拘らず寝過ごしてしまう。そして、6時半に眼を覚ましてみると、彼はベッドの中で巨大な毒虫(Ungeziefer)に変身してしまっているのである。仰向けに寝ている背中は胃のように固く、柔らかい腹は弓状に反り、幾つかの節に分節されており、図体に比べると情けない程細くてたくさんの脚がついているという姿で、(傍点筆者) 背中は甲虫状、腹部と足は何らかの節足動物の形になっているのである。

しかしグレゴールは、自分の変身した姿を仔細に観察したのにも拘らず、この事態を認めよ

うとはせず、「もう少し眠ったらどうかな、そうすればこんな馬鹿げたことはみんな忘れてしまうぞ。」(E S. 57) とか、「これまでもよく、妙な恰好で寝ていたせいらしく、ベッドの中で身体が少し痛かったことがあるのだが、起きてしまえば、痛みは嘘のようにケロリと消えていた。今日のまやかしもやがては溶け去るはずだと、ただその時のくるのを待ち受けているのだった。」(E S. 60) といった具合に受け取るだけなのである。あるいは、この変身を彼の仕事についてまわる職業病のように捉えるのである。グレゴールは右を下にして眠る癖があり、右を下にしてもう少し眠ろうと努力するのだが、毒虫に変身した体では右を下にすることができず、従って眠ることもできない。この時彼は、彼の職業、とりわけ同業他社の人達に比べて比較にならない程の厳しい勤務を呪いつつ、「早起きすると、まるきり頭がぼけてしまうものだ。人間は寝なくてはだめだ。」(E S. 58) と述べてみたり、声が変わってしまったのも、「セールスマンが職業柄かかりやすい本格的な風邪の前ぶれにきまっている、そのことには全く何の疑いもなかった。」(E S. 60) と考える。

こうした考えは、例えば、グレゴールが朝5時の列車で出かけなければならないこと、また、本店の小使いが本当に5時の列車で彼が出かけたかどうかを駅で見届けるといふ、通常では考えられない会社側の厳しい態度と対比されて表現される。会社がグレゴールに要求する勤務に対する厳しい要求は、更に「ほかのセールス連中の生活ときたら、ハレムの女なみじゃないか。たとえばこちらが昼前に宿へ戻って、やっとの思いで手に入れた注文を本店に送ろうとする頃、旦那方はのんびりと朝御飯の最中だ。わが社でそんなまねをしてみろ、即刻お払い箱にきまっている。」(E S. 58) とも述べられる。もっとも、この言明には仕事の厳しさ故に、グレゴールによって大いに誇張されてもいるだろうが、彼の仕事が特に厳しいものであることを表わしているのは間違いない。

グレゴールは自分の身に起きた事態をまだ正確に認識していないとはいえ、変身はこのように常に彼の職業と関連付けられているのであるから、変身が彼の職業への呪詛の感情と関わりがあるのは確かである。それに、この作品の第一章の前半では、自らの変身の姿を細かい芸で叙述した後に、自己の職業への嫌悪感の叙述が繰り返されるという構造を持っているのである。先に述べた「もう少し眠ったらどうかな」云々の言葉の前には、自己の変身した姿の詳しい説明があり、「こんな生活の一切合財、悪魔にのしをつけて進上したいよ！」との言葉の後には、「見ると、かゆい所は小さな白い斑点が一面に散っていて何とも見当がつかなかった。脚を一本出して触ってみようとしたが、すぐさま引っこめた。触った途端にぞくりとしたのだった。」(E S. 58) と心にくいほどの巧みさで、毒虫の描写がなされるのである。

変身と職業への呪詛が関連づけられ、また、作品の進め方自体のうちでも両者が対比されているとすれば、グレゴールが目覚める時に見た「胸苦しい夢」(E S. 57) もまた彼の職業への嫌悪感と関わっていることは最早明白であると言えるだろう。

『変身』は三章から成り立っているが、変身という事態の出来が引き起こす一連の出来事を

扱っている第一章では、変身と並んで時刻の経過が重要な役割を果たしている。5時の列車に乗り遅れたために、じきじきに専務が会社から事情を調べに来たり、グレゴールは彼が来る前に何とかしてベッドから降り、部屋から出て遅くとも8時の列車で仕事に出かける意志を示し、仕事をないがしろにする気は毛頭ないことを納得させようとするのである。その為、グレゴールは非常な努力を払ってベッドから降り、ついで、内側から扉の鍵を開けようとして（鍵穴に鍵を差し込んだままの状態で閉じられている）、歯のない顎で鍵にぶらさがりながら変身した体を回転させて開けるのである。しかも、その際に口の中を怪我するのも気に掛けていないのである。こうやってやっとの思いで観音開きの片方の扉を開け、扉1枚分の幅はグレゴールの体の横幅より狭いので、扉につかまつて立ったまま体を回転させ、専務と両親のいる居間に姿を現わし、事態を決定的にしてしまう。

無論、この時点でもグレゴールは、自己の変身は何かの「まやかし」と信じている訳であり、客観的な事実との乖離が逆にグレゴールと彼の職業との関わりが強さを表わしているのであり、同時にグレゴールと職業との間にある克服不能の対立を如実に物語っているのものである。

また、6時半に彼が目を覚ました時に、彼はとうに出発したと思っている家族が騒ぎ出したリ、グレゴールは変身した体のまま空しく7時の列車で出掛けられるよう様々な努力を行ってもいるのである。

こういう具合に、時刻の流れが第一章を展開させる基軸、動力になっていると同時に、この時刻こそグレゴールが絶対に守らねばならないものとして全ての登場人物に意識されるものであり、彼の職業への隷属と、隷属を強いる一切のもののシンボルともなっているのである。つまり、解放を心底から望んでいるグレゴールが、本心を露ほども表わすこともできず、嫌悪してやまない職業を放棄できないという物語の進行を担保しているのであり、先に述べたような物語の構造それ自体と共に変身の原因が仕事への嫌悪感のうちにあることを更に強く示唆してもいるのである。

また、虫に変身したにも拘らず、中味は人間であり続けること、声が虫の声になり他人には理解できないが、グレゴール自身は人間の話を理解できるという状況設定もまた極めて重要な作品構造を成しているのであるが、この強調された対比は、やはりグレゴールと仕事との間のアンヴィバレンツに対応しており、変身の理由が仕事への嫌悪感にあることを示唆しているのである。

こうして見てくると、作品の内容、叙述の仕方、作品の構造までもが、変身の理由が職業との間に決定的な矛盾と対立がありながら、自らをその職業から解放できないこと、それ故にのみ続ける強い職業への嫌悪感にあることを指し示しているのである。

とはいうものの、変身の原因がこれだけに止まる訳ではなく、作品の中では決して明示的には示されることのない父親と息子の対立のうちにも見られるのだが、叙述の都合上、このことは後の章で述べる。

IV. 変身の意味

『田舎の婚礼準備』では実際に変身する訳ではなく、分身を田舎に派遣し、本当の自分は虫の姿になってベッドに横たわっているのを主人公が想像するのだが、これは危険を回避し、自分を防衛するためであった。しかし表面上は、『変身』では自己防衛、自己保存を目的として変身を果たしたと考える根拠はどこにも見られない。『変身』のグレゴールは、意識の中では彼の職業を呪詛し、解放を真に願っていても、決して職業を放棄しようとはせず、むしろ職業を奪われるのを極度に恐れてさえいるのである。

この相違は、ラバーンが縛られる家族を持たない一人者であるのに対し、グレゴールは家族の生計を支え、なおかつ借金に縛られているという点、徹頭徹尾孝行息子であり続け、経済的に家族を守ろうとしている点から生じている。しかしながら、自己を糊塗して職業生活と社会生活をかろうじて保っているだけで、彼ら二人の本性はともに職業生活とは正反対の所にあるのである。状況の設定の相違により、両者の間では変身の意味が一見異なって見えはするが、その本性が虫として表現される共通性が存在しているのは確かなのである。既に述べたように、最終的には毒虫にまでされてしまう身体感覚の異常の背景には、自己の存在への疑念、その結果としての自我の未確立、更には人間社会へ帰属するための生の内実の欠如があるのである。無論、『変身』のグレゴールとて例外ではない。

グレゴールには人間的交流の匂いが全くない。それどころか、自らこうした交流を拒絶しているとも思えるのである。僅かに2、3人の友人がいることが示されはするが、会社では無論のこと、同業者仲間とも一切人間的関係を結ぼうとせず、たまの休暇にも自分の部屋に閉じこもり、糸鋸細工に精を出すだけで(E S. 64) 家族との団圓もないことが暗示される。家族と外出するのも年に2、3度にすぎず、グレゴールが自分の部屋で就寝する時も、もっともらしく旅先の宿で安全を計るために身についた習慣だという理由はつけられるが、三つの扉に鍵を閉めて寝るのである。これは、明らかに異常な家庭生活である。加うるに、隠居同然の父親の正餐は朝食になっており、グレゴールが朝早く仕事に出かけた後に、一家の正餐が摂られていると想像でき、食事の団圓からグレゴールは排除されていると考えられるのである。

こうしたところにグレゴールの人間性、生の内実が端的に表われている。家族という最も親しいはずの人々とさえ、当たり前の人間的交流をしようとはせず、忌避してやまない職業を介してしか人と関わろうとしないにも拘らず、家族の生計を守るために、家族のために自己のすべてを犠牲にして働くという矛盾した態度を取っているのである。こうした矛盾は、彼が孝行息子であり続けようとするところから生じてくるのである。即ち、グレゴールは自己に破壊的作用を及ぼす職業を一家の生計を支えるために放棄しようとはせずにいるのに、ザムザ家の人々は妹のグレーテを例外として、「慣れということだった。家族もグレゴールも慣れてしまったのだ。はいありがたいと金を受け取る、さあどうぞと金をさし出す、格別な温かみとそのやり

とりに通うことはもうなかった。」(E S. 79) といった具合に、グレゴールの苦勞なぞ斟酌されもせず、それがグレゴールの大いに不満とするところとなるのであり、ここに、家族間の葛藤、とりわけ父と子の対立が秘かに暗示されているのである。実はここにこそ、グレゴールは家族との団圓を頑なに拒否する理由の一端があるのであり、上述の矛盾を解く鍵があるのである。そしてまた、このような形の家族関係しか存在せず、それが持続しているとすれば、グレゴールのみならず両親もまた人間味を欠き、生の内実を備えていないことを意味する。父はグレゴールを一家の生計を立てるために働く息子としてしか見ておらず、彼の苦勞や悩みを知ろうともせず、彼の人間としての不健全性を問題にしようともしないのである。母とて同断で、「ここ一週間というもの、町を離れませんのに、毎晩家におりますの。テーブルに向かっておとなしく新聞を読みましたり、時刻表を調べましたり。——中略——そんなことだけで、楽しみなのでございますねえ。」(E S. 63 f) という具合に、様子を調べにきた専務に話し、僅かに彼の生活の仕方を気使っているだけで、グレゴールが担っている問題の本質に思いを巡らすこともしないのである。

『変身』は極めて自伝的性格が強く、この父と母も現実のカフカの父親と母親にそっくりなのである。グレゴール・ザムザ(Gregor Samsa)は、カフカが自らとの関連性を解説している⁽¹³⁾ 『判決』のゲオルク・ベンデマン同様、カフカ(Kafka)と同数の字母を持ち、また同一の母音aが同じ位置で繰り返されているし、ゲオルク(Georg)の字母を入れ替えれば、容易にグレゴール(Gregor)という名前に変形できる。ヤノーホがこのことをカフカに語った時、カフカは「符牒ではありません。ザムザは余すところなくカフカというわけではありません。『変身』は告白じゃない。もっとも——ある意味で——口が軽かったとはいえますが」⁽¹⁴⁾と答えており、自らこの作品の自伝的性格を概ね認めているのである。また、グレゴールが大いなる情熱をもって、破産した父親に代わって働き始めたのは5年前であるが、この5年という数字も偶然に思いつかれたものではない。

『変身』が書かれた1912年の5年前の1907年には、前年に大学で法律の学業を終えたカフカは、その後の法律実習も終え、10月1日に「一般保険会社」に就職して職業生活を始めているし、⁽¹⁵⁾また、6月20日にはこの作品の舞台となるニクラス通り36番地の建物の最上階にカフカ家は引っ越し、1913年11月までここに居住している。⁽¹⁶⁾この住居の部屋の配置と『変身』のそれとは酷似しており、それ故、ニクラス通りのこの住居が舞台だと言えるのである。

勿論、単に外形的事実だけではなく、自伝的事実に伴う様々な内的問題が作品の中に取りこまれ、それと関わる凡ゆる問題との関係の中で当該する問題の意味、起源、構造といったものが追求されているのである。カフカの文学の最大の特徴が、自己の失われてしまった存在基盤の探求、自己の内面世界の探求にあり、作品が作者の生の客観的対応物でなければならないのであるから、カフカ自身の生活史の中で問題となったこと、内的な葛藤、諸種の感覚や感情等が作品で取りあげられるのは当然なのである。

従って、カフカ家の中のカフカの在り様や家族とカフカの葛藤、とりわけその存在を示唆されている父対息子の対立などの問題もこの作品は含んでいる。

また、グレゴールが今の商会に勤め始める前には何をしていたのか一切書かれていないが、恐らくは何もしていなくて、ちょうど職業に就かなければならない時期に当たっていたと考えられる。というのも、この作品の主題は職業と個人の対立にあるのであるから、仮にそれ以前に既に別の職業に就いていたとしたら、作品の中でこのことが言及されないはずはないからである。更には、文学を自分の天職だと考えていたカフカが、大学で法学を専攻し、法学博士として職業生活を送るようになったのは、カフカ商会の後継者になってほしい、それが駄目なら、文学などというものの役に立たない学問よりも有益で社会的に認められた学問を学ばせようという父親の強い要望を受け入れ、妥協したからであり、こうした事情も作品の背景をなしていると想像されるのである。もっともカフカは、文学の純粹性を守るために、パンのための文学に墮することを恐れて、敢えて文学と職業を分離させているのである。しかしながら、法学を選択する必然性はなく、父の強い意向に妥協せざるをえなかったことには変わりはない。それに最初に勤めた一般保険会社の勤務は極めて厳しいものであったらしく、⁽¹⁷⁾文学との両立を許さないもので、この時に、カフカは職業と自己との抜き差しならぬ矛盾と対立に初めて本格的に悩むことになったのである。この問題は、翌年7月に知人の紹介によりはるかに条件のよい半官半民の労働者災害保険局に勤め先を変えた後も変化せず、1922年7月に恩給付きの退職をするまで、カフカについて回ったのである。このような基本的問題が生じたのは、5年前に初めて職業生活を送り始めた時であるのであるから、グレゴールが5年前に父に代わって働き始めるという『変身』の筋の設定をする際、カフカがこのことを意識していなかったはずはありえないのである。

また、『判決』の主人公は商人、『変身』では出張販売人とされているが、こうした商業に関わる職業に主人公が携わることにされるのは、カフカの父親の職業が商店主であったこと、当時のプラハのユダヤ人の多くが商業に関係する職業についていたことを反映していると思われる。彼らはユダヤ人の完全解放に伴って、経済的な成功を収めてドイツ人社会に同化すべく田舎のユダヤ人社会を捨て、ユダヤ人という出自そのものも否定しながら、ドイツ人にも圧倒的多数を占めていたチェコ人からも排斥され、ただひたすらに商売に励むよりほかはなかったのである。その上、ユダヤ人という尻尾を切り離そうとしていたため、ユダヤ人同士の人間的な連帯も社会と呼びうるものも存在せず、彼らから職業を取り除いてしまえば、彼らの手元に残るものはほぼ何もなかったのである。それ程、彼らは職業という抽象的な世界に自己を限定し、人間的な生の内容を欠いていたのである。

彼らの息子の世代のカフカ達は、田舎のユダヤ人社会で生まれ育ったが故に、それでもなお彼らとの関係を保っていた父親の世代に比べ、生まれながらにして帰属すべき社会もなく、人間的な関係が社会的にも、個々人の間にも存在しない所に身を置かされたため、よりひどい人

間的な損傷を蒙らなければならなかったのである。彼らにはすでにユダヤ人と呼びうる内容もなく、ましてやドイツ人でもチェコ人でもありえず、自らの存在が抛るべき根拠を持たず、絶えず存在の不安に曝されなければならなかった。

このような当時のプラハのユダヤ人を巡る問題もまた、『変身』が生み出される背景をなしているのである。

グレゴールが人間との交流を一切拒絶して職業にのみ生の世界を限定している生き方、このことを浮き立たせている作品の構造そのもの、そしてその自伝的な出来事との符号を総合して考えれば、変身の意味は明らかとなる。変身とは、自己に人間的な破壊作用を及ぼす職業を本能的に忌避し、そこから自己を解放し、本来の自己に回帰することであろう。しかし、その本来の自己たるや生の内実を伴っていないのであるから、虫の姿を取るのはむしろ自然であるといえる。職業という一点のみで社会と繋がり、社会的体面を保っているにすぎないのであり、その仮面を剥いでしまえば、自己の身体を疎遠なものと感じる自己、言い換えれば、精神のみならず肉体をすら所有していない、得体の知れぬ自己が表われる訳であり、上述した通り、カフカはこの姿を一貫して甲虫状の虫としてイメージしてきたのである。

それがただの虫ではなく、毒虫(Ungeziefer)になるのはそこに家族対息子、特に父親対息子との対立が持ち込まれているからである。本来は害虫とでも訳すべきなのであろうが、カフカは、作品の世界同様、実生活に於いても家族関係を壊す獅子身中の虫として自らを捉えていたし、また、父親からもそう見做されてもいたので、毒虫と訳するのが、やはり適当であろう。カフカは先に触れたヤノーホとの対話の中で、更に付け加えて「自分の家庭の南京虫について語るのは、果たして上品で口が堅いことでしょうか。」⁽¹⁸⁾とも述べており、家族に寄生し、害悪を及ぼすものとも自己を規定しているのである。『父への手紙』の中でも、カフカに東欧に息づいているユダヤ性を告げ知らせ、カフカの文学を確立させる重要な契機をなしたイディッシュ劇団の座長であるレヴィのことを「今はもう忘れてしまいましたが、とにかくひどい見幕で、害虫(Ungeziefer)に譬え——中略——犬と蚤の諺をもち出されました。」⁽¹⁹⁾とカフカが語り、父親とカフカの仲が闘いであると父親が認定した後、闘いには2種類あるとして、カフカと自分の闘いを規定して「もう一つは毒虫(Ungeziefer)の闘い。毒虫はただ刺すばかりでなく、自分が生き延びるために、たちまち相手の血まで吸いとってしまう。」⁽²⁰⁾とも述べられているのである。それ故また、毒虫への変身にはこうした自伝的背景、エディプス・コンプレックスのせいで、カフカが父親に対して抱いていたいわれなき罪悪感も背景をなしているのである。

更に付け加えるならば、芸術と市民生活の対立、父親と息子の葛藤は表現主義の作品では好んで取り上げられたテーマで⁽²¹⁾、同時代の作品をよく読んでいたカフカはここからも影響を受けていると考えられるのである。

V. グレゴールの更なる変身

グレゴールの変身は、彼が胸苦しい夢から覚めた時に必ずしもすべて完了しているのではない。また、毒虫に変身させてしまった以上、毒虫の姿形、行動、内面世界、家族との関係などがさらに明らかになされなければ物語は進行してゆかない。それ故、第二章では専らこれらのことが、特にグレゴールと家族との関わりを中心として述べられる。

もっとも、グレゴールのいっそうの変身は第一章の末尾から始まっており、ベッドの中で変身した時、体の側面に無数にあった脚は言うことを聞かず、てんでに動き回っていたのだが、グレゴールがその固い顎で鍵をくわえ、それを支点にして体を回転させ、片方だけ開いた観音開きの扉の隙間をすり抜け、父母と専務のいる居間に倒れ込み、無数の脚を初めて下にした時、脚は完全に意のままに動くようになり、行動の自由を得る。グレゴールがこういう動きに出たのは、仕事に出る意欲を示し、家族を経済的に守ろうとして、今朝の出来事を専務に説明し、納得してもらおう為であったのだが、専務は仰天して一目散に退散してしまい、母親は失神し、父親はステッキを振り回してグレゴールを自分の部屋に追い返そうとし、幅がありすぎるため扉の隙間に斜めに挟まってしまったグレゴールをステッキで一突きし、彼の脇腹に大怪我を与えてしまう。現実のカフカと父親の関係、カフカの家庭内での有り様が反映されていることを想起させる場面であるが、家族関係の中での立場の逆転、家族のグレゴールに対する態度の変化が、ここで既に暗示されているのである。

第一章はここで終わるのだが、二章以降には最早会社の人間は登場せず、父親の残した借金の返済義務のことも一切話題にならない。会社も借金もグレゴールが、何故忌避してやまない職業につかなければならなかったのか、如何に職業がグレゴールを疎外してよこすものであるかを強調する役割を果たしているにすぎず、カフカがこの作品を単なる変身譚ではなく、一つの家庭劇にしようとい図していることが伺い知れる。

こうして第二章では、専ら毒虫と化したグレゴールの様子と家族の対応の叙述が行われるのである。

毒虫に変化したことで、グレゴールの味覚も変化しており、彼の好物であったミルクが我慢のならないものになり、妹が毒虫に変身したグレゴールの好物が何か探るために、腐りかけた古野菜、ホワイトソースがこびりついている夕食の食べ残しの骨、幾粒かのレーズンとアーモンド、2日前にはまずくて食べたものではないと彼が言ったチーズ、パン、バターパン、バターに塩をきかせたパンを差し出すのだが、その中でグレゴールの口に最もあった物はチーズで、その他は、食べ残した骨についていたホワイトソースと腐りかけた野菜で、新鮮な食物は口に合わないといった具合に、一層毒虫に相応しいものへと味覚が変化してゆく。

更に、彼の脚先には吸盤のようなものが付いていて——この吸盤のことについては、グレゴールが変身した自己の体を仔細に観察しているのに、第一章では何も言及されていない——

壁や天井を気ばらしに這い回るようになり、天井に張りついていることを好み、「そうやって天井で、幸福に似た気分ひたっていると、時たま、われながら呆れたことに、身体が離れてどさりと床に落ちたりし」(E S.83)、あれ程家族を守るために執着した職業のことなどすっかり忘れてしまっているのである。

また、睡眠時間の不足を嘆いていたにも拘らず、その睡眠すら必要としなくなり、日一日と視力を失ってゆき、通りの向かいにあった病院すら今や目に見えず、「窓からの眺めが以前味わせてくれた解放感」(E S.81)をすら得られなくなってゆくのである。

グレゴールの気ばらしが部屋中を這い回ることにあると気付いた妹のグレーテは、母親と共に、グレゴールが自由に部屋を這い回れるように部屋の調度をすべて片付けようとする。その際、母親の「調度を片付けてしまうと、私たちが、もうよくなる望みはどこにもないと見きわめをつけて、何の思いやりもなしにあの子を見捨ててしまうように見えないかしら？ 多分一番いいのは、この部屋をもとのまま、どこも手をつけずにおくことね。そうすれば、グレゴールがまた私たちの所に戻ってきた時、何も変わっていないのを見て、それだけあっさりと、そのあいだにあったことが忘れられると思うのよ。」(E S.84)という言葉聞いて初めて、変身後の二ヶ月間、自分が正気を失くしていたことにグレゴールは気づき、調度を片付けられてしまえば、人間であった自分の過去をきれいに忘れてしまうことになってしまう、そもそも、この今という今にもさらりと忘れかねないとも思うのである。

このように、グレゴールの変身は続いており、人間としての意識すら失って完全に虫になろうとしているのである。それ故、母親の意見にも拘らず、妹がグレゴールの部屋の調度を片付け始め、彼が人間であった時の思い出が詰まっている調度、即ち糸鋸やその他のさまざまな道具がしまわれていた筆筒や小学校の頃から大学時代まで使った机が運び出されるまで、母を驚かすまいと自制して長椅子の下に身を隠していたグレゴールは、たまらずに飛び出していった残された調度の運び出しを阻止しようとする。しかし、もともと現実のカフカの部屋同様、⁽²²⁾グレゴールの部屋の調度は少なく、守るべきものは僅かしか残っていない。そこでグレゴールが守ろうとしたのは、彼自らがグラビア雑誌から切り抜き、糸鋸を使って自分で作った額縁におさめた、毛皮に身を包み、毛皮の帽子を被り、ボアをまとった美人の写真であった。グレゴールが帽子屋の帳場の女の子に結婚を申し込んでいたことが第三章で事の序でのように述べられているが、この事実と写真とは密接に関係し合っている。してみるとやはり、グレゴールにも結婚問題があったのであり、今となっては唯一この写真のみが彼を人間世界に繋ぎとめておくものとなっているのである。ここにも、変身の一つの理由、結婚を巡る父対子の対立のテーマが秘かに存在している。

それはともかく、こうしてグレゴールの毒虫への変身が続いていく一方で、家族の変貌が起こる。父親は銀行の用務員として働き出し、今までは家族の助けなしではまともに歩けなかったにも拘らず、今はすっかり元気を回復しているし、妹は店員の職を得て忙しくなり、グレゴ

ールの世話も次第におろそかになっている。また、母親も高級な下着の縫製の内職をして家計の足しにしている。こうして、毒虫に変容してゆくグレゴールと家族の変貌が対比され、家族間の力学的関係の逆転が表現され、グレゴールが最早家族の一員ではなく、単にお荷物にすぎない存在と化してゆく過程が示されてゆくのである。

また、妹や母を刺激しないように、シーツを背に乗せて長椅子の下に潜り込み、彼女達からは自分の姿が見えないようにして、自己を精一杯自制しながらグレゴールの部屋の掃除や食餌の世話をしている妹の仕事をしやすくしているのに、妹には一向に感謝されず、また、グレゴールの部屋の調度を片付けている際に、額縁のガラスに体をぴったり張り付けているグレゴールの姿を見て、母親が失神してしまった際、妹は気付け薬を取りに隣室に行くが、グレゴールも何とか手伝いたいという一心で妹の後についていく。しかし、彼の善意など推し測ろうともせず、妹は後ろにグレゴールがいるのが分ると彼を脅す仕草をし、そのはずみに何かの薬品の瓶が落ちて割れ、ガラス片がグレゴールの顔を傷つけ、薬品がかかった彼の背中にはひりひりと傷むのである。

こうして、グレゴールの善意や家族への配慮はことごとく曲解され、彼の悪意と言って言いすぎなら、彼のわがままな強情さと受け取られてしまうのである。彼らにしてみれば、グレゴールはお情けで世話を受けている身で、家庭の平穏を乱すことなぞあってはならないのである。

家族には、グレゴールの声が動物の声に変化しているために全く理解不能であり、また、グロテスクな姿に変身してしまっているのであるから、グレゴールが人間としての意識を持っていることも、彼が人間の声を理解できることにも気が付かないのは当然である。繰り返しになるが、このような物語の設定が、グレゴールの善意が曲解され、家族の世界から排除されていくという皮肉な構図を支えているのである。第二章以降はこうした構図で物語は進行してゆく。これが極点に達するのは、母親をグレゴールが失神させてしまった一件を、銀行から戻ってきた父親に妹が注進した時である。彼はグレゴールが何らかの暴力を行使したものと理解し、妹の後をついてきて居間に取り残されていたグレゴールが速やかに自分の部屋に戻ろうとしていることを付度する気も起こさず、グレゴールを追いかけ回し、最後には林檎を投げつけ始め、そのうちの一つがグレゴールの背中に命中して喰い込んでしまうのである。そして、この傷がグレゴールを死に致らしめることになるのである。林檎が持つ象徴的意味、また、グレゴールの背中が天井から落ちてもびくともしない固さを持っていたはずなのに林檎が喰い込んでしまうという矛盾はさておき、グレゴールは『判決』のゲオルク同様、こうして父親の手によって死を強要されるのである。

〈注〉

テキストには1967年、Fischer書店刊の Franz Kafka Gesammelte Werke を使用し、引用に当たっては以下の略号を用いた。また、『変身』原文からの引用は頻繁にわたるので、引用の度ごとに本文中で原文の箇所を示しておいた。なお、邦訳に際しては、新潮社刊の『決定版カフカ全集』を参照したことを付記しておく。

E: ERZÄHLUNGEN

T: TAGEBÜCHER

H: HOCHZEITSVORBEITUNGEN AUF DEM LANDE

(注)

- (1) T S.128.
- (2) Kafka, Franz : Briefe 1902-1924, Frankfurt a. M., 1975, S.115
- (3) T S.214f.
- (4) Ebd.
- (5) Janouch, Gustav : Gespräch mit Kafka Aufzeichnungen und Erinnerung. Frankfur a. M., 1968, S.176.
- (6) T S.34.
- (7) Kafka, Franz : Beschreibung eines Kampfes. Frankfurt a. M., 1967, S.31f.
- (8) Ebd. S.32.
- (9) H S.317f.
- (10) H S.8.
- (11) T S.217.
- (12) H S.10.
- (13) T S.217.
- (14) Janouch. Ebd. S.46.
- (15) Brod, Max : Franz Kafka. Eine Biographie seiner Jugend. 1883-1912, Bern, 1958, S.238.
- (16) Ebd. S.141.
- (17) Vgl. Wagenbach, Klaus : Kafka. Reinbeck bei Hamburg, 1964, S.59f. und Kafka, Franz : Briefe 1902-1924 S.48ff.
- (18) Janouch. Ebd. S.46.
- (19) H S.125.
- (20) H S.161.
- (21) Anz, Thomas : Franz Kafka. Berlin, Klaus Wagenbach, 1989, S.77ff.
- (22) Brod, Ebd. S.61f.

(かわい ますたろう 本学人文学部助教授 ドイツ文学専攻)